ほぼ週刊コラム　Partnership論　その２２１

**シリーズ：『米国Partnership税制勉強会』**

**第三十一回勉強会（通年内容は**[**年表rev.9**](http://llc.a.la9.jp/Papers/evolution%20history/evolution%20history%20of%20US%20partnership%20taxation%20rev9.ppt)**参照方）の準備**

**神授王権はfictionに過ぎない。
しかもこれはthe Commonsによって懐柔されたことによって、のちのちthe sovereignty of the peopleという別のfictionに置き換えられる道を歩み始めた。**

20170126 rev.1 齋藤旬

 [**Inventing the People**](https://www.amazon.com/Inventing-People-Popular-Sovereignty-England/dp/0393306232/ref%3Dsr_1_1?ie=UTF8&qid=1477553338&sr=8-1&keywords=Inventing+the+People)**の半訳作業ファイルwork11を**[**和英混訳**](http://llc.a.la9.jp/WaEi%20KonYaku.htm)**のコーナーにアップした。**

1．The Divine Right of Kings　神授王権 25-26

今週は、結論部二段落を半訳し、この章の半訳を終えた。先週、風邪でボーっとする頭で、大事なこの結論部を誤訳してしまった。「（神授王権は）the peopleの主権という別のfictionに置き換えられた」と「完了形」にしてしまったが、正しくは「the peopleの主権という別のfictionに置き換えられる道を歩み始めた」だった。

　なお、注や補遺を示す括弧記号を整理した。即ち：

　和英混訳作業ファイル：原文英語（和訳）ないし和訳（原文英語）のスタイル。

原文にある（）は［］で、” “は「」で、訳注と訳者補遺は【】で示した。

とし、括弧記号を付け直した。

**さて、私があれこれ陳べるのは止して、結論部二段落を転記して今週号としたい**。

Grand Remonstrance（大抗議文）は、その帰結であるthe ministerial responsibility（閣僚責任制）に直ぐに結びつくことはなかったが、the politics of divine right（神授権による政治）の終焉が近いことの徴候だった。反対意見を持つSir Edward Dering曰く「このRemonstranceについて最初に耳にしたとき…悪意に満ちた助言者達の危険な忠告が王を代表する意見となってしまうと私は危惧し…この抗議を*downward*に伝えようとは、即ちこの話をthe *People*に教えようなどとは夢にも思いませんでした。王にはa third Person【齋藤補遺：キリスト教の三位一体教義における第三位格、聖霊、the Holy Spirit】についてお話ししようと思いました。」しかしこの抗議こそ、王を褒め殺した帰結だった。即ち他の者が王座に登ることを妨害し続けた事によってthe Commonsは、王の臣下ではなくrivalsとして王と闘う地位にまで自分達を高めてしまったのだ。しかもこの種の争いは古いground rulesの下では成立しない。究極的には、divine sanction（神による強制力）を、王からhis people and their representatives（王の支配下にあった人々とその代表者達）に移さざるを得なくなった。

神授王権はfictionに過ぎない。しかもこれはthe Commonsによって懐柔されたことによって、のちのちthe sovereignty of the peopleという別のfictionに置き換えられる道を歩み始めた。この二つのfictionは両極端にある様に見えるが、吟味すれば実は緊密にlinkしあっていることが分かる。the king’s divine rightを受け入れつつもその権威は単一で不可分であると主張することによってthe Commonsは、自分達が決めるterms（細目条項）無しではこの権威が機能しないようにする早道をつかんだ。彼らは、誉めそやすことで王を破滅させ、力をつけた臣下をhumble（謙虚）にすることでthe humble（謙虚な人々）の台頭に道を開いた。即ち、全ての人は平等でありgovernmentsの権限はgovernする対象者達から導き出されるという世界の、新たなfictionへ道を開いたのだ。確かに、当時Westminster議事堂に座っていた者達はそんなことは夢想だにせず王の完全性を称賛していたのだろう。しかしWhiggish tricks【勝ち筋を前もって知った者が必ずしも歴史の勝者になるのではない、とするホイッグ史観の仕掛け】を歴史が操る例は、なにも彼らが最初だったわけではない。

**先週20日のトランプ大統領就任式の直後**、ローマ教皇は「Hitler didn't steal power: his people voted for him, and then he destroyed his people.」と述べるとともに「We will see how he(Trump) acts, what he does, and then I will form an opinion.」と先ずは静観を促した。（[ここ](http://elpais.com/elpais/2017/01/21/inenglish/1485026427_223988.html)参照方）

トランプが大衆迎合主義（populism）に勝ち目を感じていたのは確かだろう。彼は恐らくホイッグ史観者ではない。その点は17世紀のthe Commonsよりも先見の明がある。しかしthe Commonsがその後、アニハカランヤ、the peopleの主権を生み出す道を切り開いたのに対し、トランプは何をもたらすのだろうか。教皇のHitler destroyed his peopleの喩えが杞憂であって欲しいと願うばかりだ。

今週は以上。来週も請うご期待。